

英語教育に対する見解と期待

—学内アンケート調査結果—

木下 陽子* 宝来 華代子**

Faculty-wide Perspectives on English Education and Globalization

by

Yoko KINOSHITA *and Kayoko HORAI**

要 旨

この報告書は崇城大学教員の Sojo International Learning Center (SILC) における英語教育に関するアンケート調査をまとめたものである。SILC 教員を除く崇城大学専任の全教員に対し 2019 年 12 月末から 2020 年 1 月初頭にかけてアンケート調査を実施し、86 名からの回答を得た。教員の多くが学生の学習、就職活動等に深く関わりながら、学生のニーズ、社会の大学生に対するニーズの両方をより理解していると考え、英語教育に対する意見を求めた。英語教育の在り方は社会、経済動向によって左右されることも多く、変化に合わせての改革が必要である。アンケート調査はリッカート尺度と自由記述を用いて実施した。

在学時の英語力に関しては読解力の促進を期待している一方で、就職後の業務ではコミュニケーション力の重要性を示していた。1, 2 年生の基礎英語教育の修了時に学生に期待する英語力はヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR: Common European Framework of Reference for Languages) の英語運用能力基準で A2 が 45.4%、B1 が 32.6% で、卒業時の英語力の期待に関しては、B1 が 45.4%、B2 が 34.9% という期待値が示された。このことから、3 年次以降も英語学習の継続による更なる英語力の向上を期待していることがわかる。

Key Words : 英語教育、高等教育、グローバル化、第2言語習得

1. はじめに

現代社会において英語によるコミュニケーション能力は必須である。平成 25 年に文部科学省は、グローバル化に対応した教育環境作り促進に向け、「英語教育改革実施計画」を公表した。具体的な目標の1つとして高等学校卒業段階で、英検 2~準 1 級、TOEFL iBT60 点前後以上等を設定し、生徒の英語力の把握・分析・改善を行うことを必要とし、学生の特性、進路

に応じた英語教育や英語運用能力の高い目標値が示された。しかし、英語学習者にとって日本での学習環境では、地理的な要因から一般的に英語に触れる機会が限られており、英語を使用する機会が少ないため、学習者が英語学習のモチベーションを維持することは容易ではない。大学では通常、英語は必修科目であるが、非言語分野を専攻するほとんどの学生にとって、英語は優先的な学習目標ではない。

英語と専門分野の学習の連携に関しては、教科科目の学習内容 (コンテンツ) と言語習得を組み合わせた学習指導 CLIL (Content and

*崇城大学 総合教育センター SILC 講師
**崇城大学 総合教育センター SILC 准教授

Language Integrated Learning)、内容言語統合型学習が注目されてきている。語学と専門分野の学習の連携や大学間での横断的な学生へのサポートは今後、さらに重視されるだろう。

また、実社会のニーズに関しては、厚生労働省の発表によると令和元年10月末の時点で外国人労働者数は前年度19.8万人から約166万人に増加し、過去最高を更新した。建築業、製造業、農業の技能実習生の増加など、各分野においての外国人とのコミュニケーションの機会が増えているのは明らかである。

本調査は高等英語教育と時代と共に度々面する諸問題の影響を受ける社会ニーズの変化の関係を理解することも目的としている。英語教育への見解は大学側と受講する学生側とは異なる場合が多々ある。英語教員以外の大学教員の英語教育に関する学生への期待値、また国内外の社会経済の変動に伴う大学生に求められる英語力の変化や就職等で必要とされる英語に関する情報の共有は現代の学習者と社会のニーズに適応した教育システムを構築するためには欠かせない要素である。そこで、大学教員の英語教育に対する見解や期待を理解し、より細やかな視点からの教育的アプローチの実現に向け、アンケート調査を実施した。調査は、SILC教員を除く崇城大学専任の全教員を対象にオンラインで実施した。

2. 背景

本調査を実施した崇城大学の英語教育は、2010年にグローバルに活躍する人材の育成を目指し神田外語大学と提携し、英語総合教育施設 Sojo International Learning Center (SILC) を設立した。設立当時は8名の英語を母国語とする教員及び1名の日本人教員で構成されていたが、10年目を迎える現在では、外国人教員が17名、日本人教員が2名となった。SILCに併設して学生の意欲や自律性、コミュニケーション能力を育成するための手段として、2010年に英語学習の為に自律学修センター (Self-Access Learning Center : SALC) を設立したが、開設から4年で年間の延べ利用者数が約1,500人か

ら18,000人にまで増大し自律学習促進へ貢献した。その後、2014年に文部科学省の「大学教育再生加速プログラム」に崇城大学のアクティブ・ラーニング (申請区分テーマI) が採択され学科ごとのSALC及び全学SALCが開設され学生の自律学修をサポートしている。

必須の基礎英語科目として、1年生がイングリッシュコミュニケーションIとII (英語I, IIの名称が2020年度より変更)、2年生はイングリッシュコミュニケーションIIIとIVを履修する。本調査項目の基礎英語 (英語I~IV) はこれらの必須科目を指す。これらのコースは週に2回、1回90分、1クラス30名以下で、SILC Online (Moodle) を活用し、4技能 (スピーキング、リスニング、リーディング、ライティング) の向上と同時に自律学修者育成へと繋がるよう、新しい教育アプリの活用や様々なテクノロジーを積極的に取り入れ、学生の関心の高いリソース開発を続けている。

また、英語選択科目 (または選択必須科目) として3年生以上及び大学院生を対象とするアカデミックイングリッシュ、全学年を対象とするTOEIC演習、異文化理解や留学を目指す学生の為の留学英語、異文化理解に関する英語圏と文化などの科目が開講されている。

3. 調査内容と方法

本調査では、自由記述を含める以下の10項目をオンラインでのアンケートを実施した。項目内容は筆者が現況から、英語教員以外の大学教員の学生の英語力等に対する意見や期待を知る為に必要と思われる内容を考慮した。

1. 学科の学生にとって大学英語教育は必須であるとお考えですか？
2. 本学の基礎英語I~IVの学習期間 (1, 2年次) は適切であるとお考えですか？
3. 基礎英語修了後、3, 4年生の学生が先生の講義または課題等で英語を必要とする頻度はどの程度ありますか？
4. 学生の将来における英語運用能力の必要性をどのように感じていますか？

5. 学科の学生に期待する基礎英語（1，2年次）修了後の英語力はどの程度を期待していますか？
6. 学科の学生の大学卒業時の英語力はどの程度を期待していますか？
7. なぜ学科の学生が卒業時に上記の英語力が必要であるとお考えですか？ご意見をご記入下さい。（自由記述）
8. 大学での基礎英語（英語Ⅰ～Ⅳ）学習において、重要だと考える順に番号を付けて下さい。
9. 質問8で最重要と選んだ学習についてその理由を教えてください。（自由記述）
10. 学生に英語学習を意識的に促したことはありますか？

4. アンケート調査結果

アンケートの回答者数は86名であった。それぞれの項目の回答集計は以下の通りである。

1. 学科の学生にとって大学英語教育は必須であるとお考えですか？

表1 質問1の回答結果

回答選択肢	%	回答者数
全く必要ではない	1.2%	1
必要でない	2.3%	2
必要である	30.2%	26
とても必要である	66.3%	57

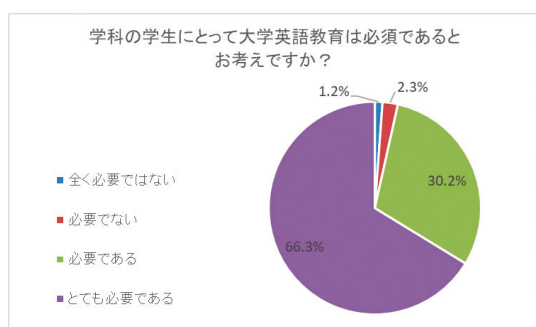


図1 質問1の回答結果円グラフ

2. 本学の基礎英語Ⅰ～Ⅳの学習期間（1，2年次）は適切であるとお考えですか？

表2 質問2の回答結果

回答選択肢	%	回答者数
不適切である	3.6%	3
やや不適切である	11.9%	10
適切である	70.2%	56
非常に適切である	10.7%	9

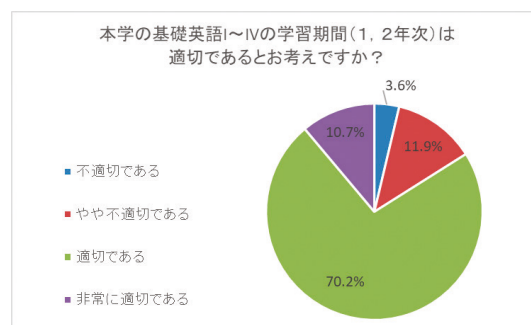


図2 質問2の回答結果円グラフ

3. 基礎英語修了後、3，4年生の学生が先生の講義または課題等で英語を必要とする頻度はどの程度ありますか？

表3 質問3の回答結果

回答選択肢	%	回答者数
全くない	3.5%	3
滅多にない	24.4%	21
時々ある	44.2%	38
よくある	26.7%	23

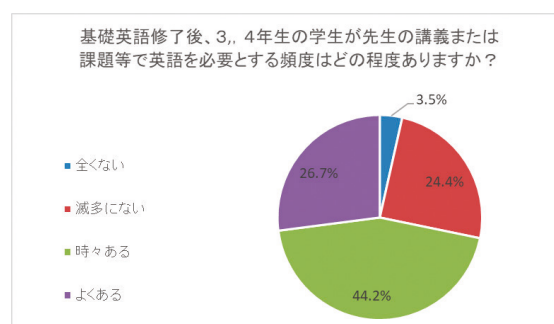


図3 質問3の回答結果円グラフ

4. 学生の将来における英語運用能力の必要性をどのように感じていますか？

表4 質問4の回答結果

回答選択肢	%	回答者数
全く必要ではない	3.6%	0
あまり必要でない	8.1%	7
必要である	30.2%	26
非常に必要である	61.6%	53

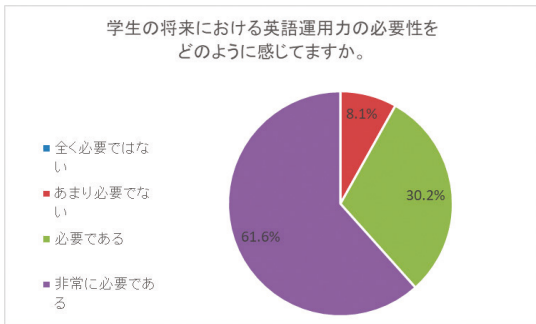


図4 質問4の回答結果円グラフ

5. 学科の学生に期待する基礎英語（1，2年次）修了後の英語力はどの程度を期待していますか？

表5 質問5の回答結果

回答選択肢 (CEFR)	%	回答者数
A1	10.5%	9
A2	45.4%	39
B1	32.6%	28
B2	9.3%	8
C1	2.3%	2
C2	0.0%	0

英語力に関しては、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）の英語運用能力基準をアンケート調査で表示し回答基準とした。（Appendix参照）

6. 学科の学生の大学卒業時の英語力はどの程度を期待していますか？

表6 質問6の回答結果

回答選択肢	%	回答者数
A1	2.3%	2
A2	10.5%	9
B1	45.4%	39
B2	34.9%	30
C1	5.8%	5
C2	1.2%	1

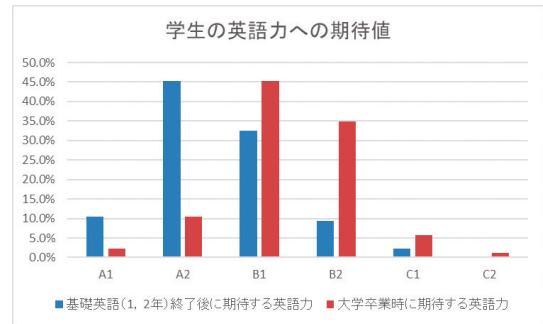


図5 学生の英語力への期待値

質問5では基礎英語（1，2年次）が修了する時点での英語力の期待値はA2が最も多く45.4%、B1が32.6%だった。質問6の大学卒業時に期待する英語力については、B1が45.4%、B2が34.9%と示された。

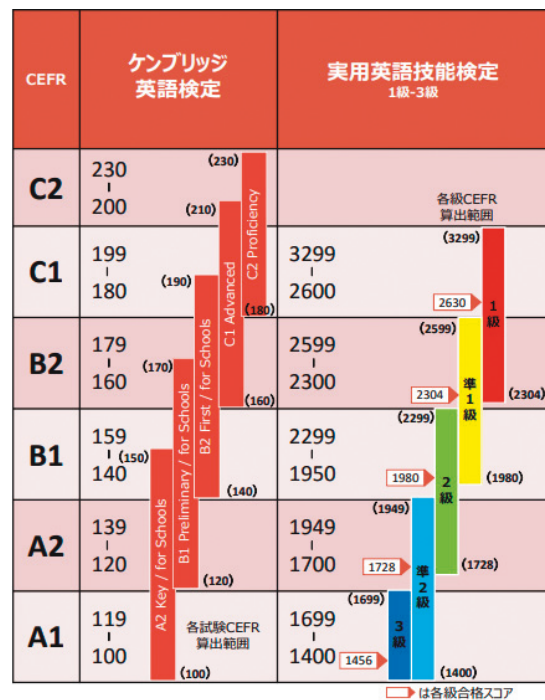


図6 各資格・検定試験とCEFRとの対照表 (文部科学省2018年一部抜粋)

7. なぜ学科の学生が卒業時に上記の英語力が必要であるとお考えですか？（自由記述）

表7 質問7の回答集計分析結果

就職後、仕事	34
国際社会	13
専門分野の学問等	8
就職のため	4
論理的思考を拓げる	2
その他	2

就職後の業務のために重要であるという意見が最も多かった。例えば、「今後、仕事上で英語が求められる。特に建設業界では、現在すでに海外の現場が増えてきている」「どんな仕事に就くとしても必要」などの意見があった。特に航空業界に関しては必須という意見が多かったが、一方で業務での活用頻度が少なく、「最低限度で良いと思われる」という意見もあった。国際社会を意識しての意見では「国際社会との接点なくして日本社会は成り立たないと思うため」「英語でのコミュニケーションは社会のスタンダードと考えてほしいため」などの意見が出されていた。専門分野の学問促進のために重要であるという意見では「英語の論文などの要旨などを理解し、引用した場合はその内容をおおまかにでも説明できる必要があるため」など、具体的に論文、学会での英語のニーズが述べられていた。就職のためという意見は少なかった。少数ではあったが、第2言語学習を通じた論理的な思考力の向上や母国語での表現力の上達を期待する意見もあった。一方で、まずは母国語の言語使用能力を上げることの重要性を指摘された意見もあった。

8. 大学での基礎英語（英語 I～IV）学習において重要だと考える順に番号をつけて下さい。

85名のうち26名がリーディング、25名がリスニングを最も重要であると回答した。一方で、2番目に重要なスキルとして31名がスピーキングと回答した。図で示されるように基礎英語習得で教員が最も重要と考えるスキルはリーディング、リスニング、スピーキングの順となるが（図7参照）、上位1番目と2番目を合わせてみ

ると、リスニング、スピーキング、リーディングの順位となる。（図8参照）

表8 質問8の回答結果

	1	2	3	4	5
リーディング	26名	7名	27名	15名	6名
	32.1%	8.6%	33.3%	18.5%	7.4%
リスニング	25名	25名	16名	13名	5名
	29.8%	29.8%	19.1%	15.5%	6.0%
スピーキング	16名	31名	11名	13名	14名
	18.8%	36.5%	12.9%	15.3%	16.5%
文法	13名	8名	10名	13名	40名
	15.5%	9.5%	11.9%	15.5%	47.6%
ライティング	2名	12名	20名	30名	17名
	2.5%	14.8%	24.7%	37.0%	21.0%

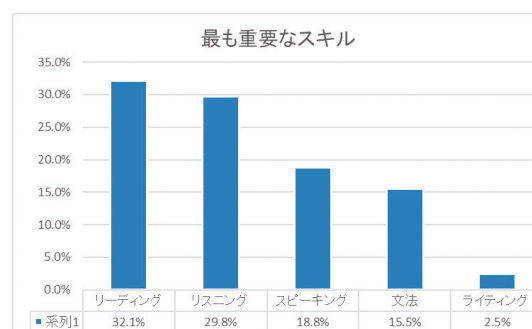


図7 質問8基礎英語学習で最も重要と考えるスキルの回答集計結果

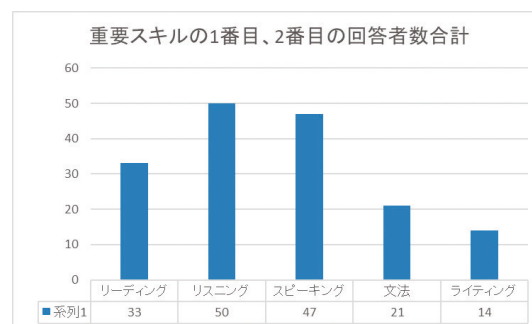


図8 質問8基礎英語学習で重要と考えるスキルの1、2番目に選択されたスキルの合計

9. 質問8で最重要と選んだ学習についてその理由を教えてください。（自由記述）

表9 質問9の回答集計分析結果

コミュニケーションのため	25名
基礎力	18名
専門分野の学問	14名
仕事	11名
学習意欲向上	2名
その他	2名

基礎英語学習で重要と考えるスキルを選択した理由は25名がコミュニケーションの為にあった。次に多かった理由は基礎力として必要であるためと考える意見で「聞き取れないとコミュニケーションにならないため」「読むことによる情報の収集は語学の原点であると思うので」「きちんとした英語が書けないので」などの意見があった。また専門分野の学問において必要であるためという意見も比較的多く聞かれ特に論文に関する読解力が重要であるためという意見が多かった。

10. 学生に英語学習を意識的に促したことはありますか？

表10 質問10の回答結果

回答選択肢	%	回答者数
全くない	9.3%	8
時々ある	40.7%	35
頻繁にある	23.3%	20
常に促している	25.6%	22

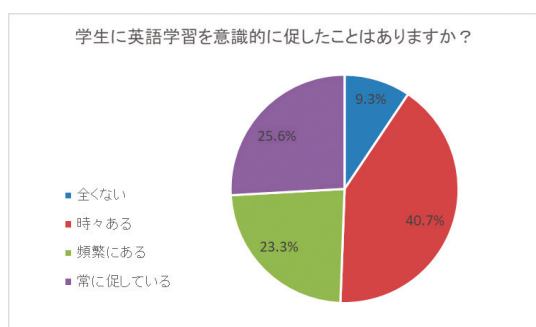


図9 質問10の回答結果円グラフ

5. おわりに

大学英語教育は必須であるかという質問に対する見解は96%の教員が必要または非常に必要だと回答した。1, 2年生の基礎英語の教育期間に関しても適切である、非常に適切であるという回答が約80%であった。

3年次以降の専門科目等での学習において学生の英語の必要性に関しては72%と高いニーズがあることが示された。将来における学生の英語運用能力の必要性に関しては約92%が必要性を支持した。基礎英語(1, 2年次)修了後の英語力への期待値はA2が45.4%、B1が32.6%を希望する意見が多かった。一方で卒業時の英語力の期待に関してはB1が45.4%、B2が34.9%という期待値が示された。このことから、3年次以降に関する英語学習の継続による更なる英語力の向上を期待していることがわかる。一方で実際は3, 4年次での選択英語科目の履修は限定的であり、またSALCを活用した高学年の学習活動は十分であるとは言い難い状況である。基礎英語では同施設内に教室とSALCが設置されていることやカリキュラムにSALCでの活動が組み込まれている等から学生にとってアクセスしやすい環境である。しかし必須科目を修了し、英語の学習目的が明確でなくなると活用率が大幅に低下する。また、3年次以上を対象として開講しているアカデミック英語の履修者数は年間20~30名である(院生を含む)。教員側が学生に求める英語学習の継続の必要性和現状との差異がやや大きいように思われる。つまり今後、3, 4年次の学生の自律学修を促進させるためのサポートが重要な取り組みとして検討されるべきだろう。専門分野の学問を学ぶためにリーディング力促進への期待値が高いことが分かった。一方で、国際社会への対応や卒業後の仕事で活躍を願うリスニング力やスピーキング力といった他者とのやり取りを想定した英語力の促進にも期待を持っていることが分かった。

今回の調査では、卒業時に期待する英語力とその理由に関して、「将来仕事で必要となる」という回答が多く見られた。また、在学中(主

に3, 4年次)に必要な英語スキルとして、論文執筆や文献検索など専門分野での読解力や国際学会への参加などに必要な会話力(プレゼン力)等の必要性が多く見られた。基礎英語修了後での英語力育成の重要性が示された。

Dörnyei (2005) は第2言語習得の動機についてL2 Motivation System (L2 動機づけ自己システム) が3つの要素から成り立っていると提唱している。その1つである Ideal L2 Self (理想L2自己) は学習者自身の英語話者としての理想像を示す。学習者が第2言語を話せるようになりたい(旅行関係や国際的に働く等)と考えるとき現実と理想の自己の差を埋めようとする為、Ideal L2 Self は強力なモチベーションとなる。大学生の場合、基礎英語修了後の英語の必要性を考慮すると自律学修の促進と定着は必須であるように思われる。全ての学生が義務的に行うのではなく、学生の将来希望する就職先、大学院、留学先などで英語が使用される機会が見込まれる場合、その点を如何に対象となる学生達に伝えるかが重要と考える。具体的なイメージを持たせられるよう積極的な働きかけが必要だろう。将来の自分と英語学習の関連性を明確化することで学習意義を理解し、強い動機付けとなる可能性は高いと思われる。

本調査は横断的な意見収集を行うことにより、今後益々の連携促進へと繋がり、意義のある教育を提供し学生の学びと成長へ繋がることを願う。

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました崇城大学の教員各位にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

参考文献

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について。(2015). 文部科学省:

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1343704.htm

「外国人雇用状況」の届出状況【概要版】。(2019). 厚生労働省:

<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/000590309.pdf>

CouncilBritish (編). (2001). CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠). British Council:

<https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/ees-cefr-jp.pdf>

Dörnyei, Z. (2005). The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

各資格・検定試験とCEFRとの対照表。(2018). 文部科学省:

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf

崇城大学大学教育再生加速プログラム運営委員会。(2019). 大学教育再生加速プログラム (AP) 取り組み報告書. 崇城大学.

和泉伸一, 池田真, 渡部良典.(2012). CLIL 内容言語統合型学習. 上智大学出版.

Appendix

段階	CEFR	能力レベル別に「何ができるか」を示した熟達度一覧
熟達した言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりと構成の詳細な文章を作ることができる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事務について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

ブリティッシュ・カウンシルの英語教育・英語4技能試験について www.britishcouncil.jp

